

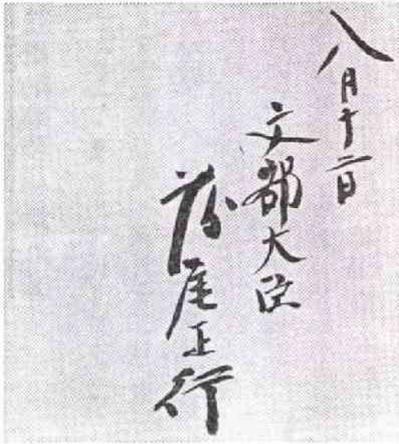
日本記者クラブ会報

十一年ぶり、ラウンジも手直し

第一期拡充作業と並行して

クラブの夏は行事も少なく、メンバーや同伴ビジターの入場もまばらとなるが、事務局は逆に忙しいシーズンとなりがちだ。一昨年は十五周年記念の出版事業に、昨年は会費改定やクラブ賞の新内規策定、アラスカとの契約改定に、そして今年はク

ラブ機能の拡充強化に暑い毎日を送り、九月一日には八階に応接室と第一、第二会議室を新設、事務局も移転という第一期作業を完了した。秋風とともに第二期作業が始まり、記者会見室の拡張、事務局跡のレストラン付属配せん室化、北ホー



藤尾文相(上)と伊藤日航会長(下)の記念署名

第199号
1986年
9月10日発行
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
日本プレスセンタービル 100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話 五〇三一二七二二(代)

ル・クロックの移設、レストラン前のアコーデオン部分の撤去などが行われる。

クラブの財産、世界首脳の写真を機会に、クラブの顔、であるラウンジにも必要最小限の手直しを加えた。

まずはラウンジを色どる世界各国首脳のポートレートだ。来訪のゲスト・スピーカーたちに、ここがどんなクラブかを説明するには、これらの写真の前に連れて行くにかぎる。だが、問題がなくなかった。電灯に光って、肖像がよく見えないことだ。それを解決するため、額のガラスをすべてノン・グレア(無反射)に取り換えた。

クラブの最高の財産であるこれらのポートレートは、まだたくさんねむっている。八階に新設の各部屋にも、江尻新聞協会顧問寄贈の著名な英新聞人肖像画とともに、それぞれ

の壁面を飾ることにした。

ソファやアームチェアも

会員アンケート調査で苦情が寄せられた九階ラウンジのソファやアームチェアも手直した。帝国ホテル以来の愛用品ながらハゲの目立った木製チェアはすべて塗りかえ、いたみの激しかったソファはみんな張りかえた。しかし自慢のアトモスフェアは変えていない。

そんなにいろいろやって、お金は大丈夫か、会費値上げにつながるのではないか、という質問もないではない。費用は資産準備積立金からの理事会の承認をえているので、一般会計は圧迫しない。設備投資の大半は八階各室への空調補強、九階配せんスペースに備える給食用ウォーマーやクーラー類の購入に占められ、内装費などは節約にこれつとめた。

黒く、大きな八階の入口ドアのユニークさも目を引くだろう。応接室や会議室の内装の一部とともに、前のテナントであった英国系金融会社にそのまま残してもらったものである。

笠置前事務局長死去

(かさぎ・まさあき氏) 日本記者クラブ前事務局長) 八月十二日(火)午後八時七分、肺ガンのため東京都中央区の京橋病院で死去。六十七歳。同氏は東大独文科卒後、南京ドイツ大使館秘書官、世界日報記者を経て昭和二十四年日本新聞協会に入る。国際部長、事務局次長などを務め、四十八年理事待遇、五十年事務局長。五十五年一月、日本記者クラブ事務局長に就任。酒井新二、若松信重、新井明の三理事長のもとで、クラブの充実、発展に尽力した。五十九年五月退任。六十年三月から六十一年三月まで日本新聞協会欧州駐在代表。前夜式は八月十三日銀座教会で行われ、本葬は(喪主妻八千代さん)同教会で九月十二日(金)午後二時から。



日本記者クラブの初代の事務局長として功績のあった前田雄二君に続いて、クラブの運営を軌道に乗せる

のにおおいに貢献した三代目の事務局長笠置正明君をうしなつたことは、多年新聞界の共同機関の発展のために労苦を共にしてきた盟友の一人として、痛恨に堪えない。

日本記者クラブはマスメディアとニュース源になる一般社会との交流を促進し、またジャーナリスト相互間の疎通をはかることにより、マスメディア全体の

報道、評論活動を、一層活発化することを目的として作られた。また取材編集面では、国資その

他の外国からの要人にたいして、日本人に話しかけるための広場を提供することが、創立の大きな理由となつていた。創立以来の歴代の理事長をはじめ、役員・事務局長などの献身的な努力、会員社の財政的支援によつて、世界のどこの国の記者クラブに比べても、決して劣らない堂々たる組織となり、輝かしい活動を記録している。しかし、その陰には局長をはじめとする事務局の努力が、

大きな推進力になつてゐることは疑問の余地がない。

そうした意味で、記者クラブを運営する者には、いろいろな資質が要求される。第一は「プレスと自由と責任」について、高い見識を持ったジャーナリズムの経験者であること、第二は国際交流に通じた国際人であること、第三は団体の運用に通じたマネジャー的素質のあることなどは、まず欠くことのできない要素

盟友を悼む

江尻 進

であろう。

こうした意味で、笠置正明君は記者クラブの運営を托する責任者として、うつつけの人物であつた。

「外国語を喋れること」が、むしろ軽蔑されていた時代の東大独文科時代から、シンチンガー講師について会話に習熟し、さらに新聞研究室で、日本の新聞研究の創始者の小野秀雄先生からジャーナリズムの基礎を学んだ。大学卒業後は、ドイツ語

の会話力が買われて、戦前の盟邦だったドイツの南京大使館でオットー大使の秘書官となつたことから、本格的な国際人としての修練が始まつたが、ドイツの敗戦とともに、わが南京大使館情報部に転じ、終戦を迎えた。帰国後は国際報道を通じて、日本人の国際理解を進めることが、新しい日本にとって不可欠であるとの目標で創刊された「世界日報」の記者となり、GHQその他の渉外関係の取材に当たつた。

世界日報が廃刊となつた後日本新聞協会の協会報記者に転身し、協会の国際活動が始まつた頃から活動の第一線に立ち、国際課に次いで国際部が新設されるにつれて、それぞれ最初の責任者になつた。そして、水を得た魚のような活躍ぶりは、国際的に高く評価された。

協会の事務局長からクラブの事務局長に転じての四年余は、その延長線上の活動であつたが、その中でも協会などからの財政援助を離れ、財政の自立を実現したことは、クラブに残した大きな功績の一つに加えられる。

(日本新聞協会顧問)

クラブゲスト

森 泰吉郎 森ビル社長



当初四五〇人からいた地権者の説得から始め、十七年間を要して今春再開発事業「アーキビ

ルズ」を完成させた。いま流行の「民活」の一つのお手本との評価もある。が、ご本人は淡々としている。「民活というのはいろんな意味で使われていましてね。民間にカネが余っているから、これを利用してというのはいろんな意味で、あまり意味がない。お上のかじ取りもよかったです。民間の努力で築き上げた経営ノウハウのようなものを、どう生かすかを考えるのらないことだと思いますが、現在、どういう方向へ行っているのか、私にはよく分からない。和服のせいではないが、商人(あきんど)という言葉の思い出させる。慎重でムダ口はつかむ。五十歳を過ぎて、学界(横浜市立大商学部)から実業界へ転身した人とは思えない。【八月六日(水) 懇談会 司会 広瀬一郎企画委員 出席 五四人】

藤尾 正行 文部大臣



たったミルク一杯だけで、この元気のだから、普通に昼食をとたらどうなるのだろう。(大臣はダイエット中でサラダ

さえも断った) 「第三次中曽根内閣はサン・セット内閣である。党・財政の中核にいる三人はライジング・サンのもりで一生懸命やっている。私とか副総裁になった金丸君は中間にあつて、中曽根さんにも傷をつけないで、新しく出てくる方にスムーズにパトントタッチをさせていく役割。中曽根内閣の幕引き役である」。続いて日の丸に敬意を払わぬ風潮を、臨教審を、テレビ番組を、歴史教科書問題をメッタ切り、質問に答え返す刀で靖国問題を。「私の場合なら文部大臣藤尾正行で参拝させてもらう。自信をもってやればいい。【八月二日(火) 昼食会 司会 三宅久之 企画委員 出席 九一人】

伊藤 淳二 日本航空会長

「もともと私は飛行機は嫌い、一週間一回の大阪との往復も、従来は新幹線を利用していました。車中で三度盗難にあつてもその方がまだましだと思つていたのですが、いまは全部飛行機、それも操



縦室の中へ入れてもらい、パイロットと一緒に飛んでいます。昨年十二月十八日、中曽根総理のお声がかかりで日航入りし

て、この日で八か月が過ぎた。二か月に一度総理には一時間ほど時間をとつてもらい報告していると言う。「一切注文をつけられないのがありがたい。役所や政治家のディスタンプを除くのが私の役目と言つてくださっている」。配布された「日本航空の再建に取り組んで」のレジメにとらわれず、①遺族補償②なぜ日航に事故が多いか③労使関係の順に考えを述べ、絶対安全の確保と官庁指向から顧客、利益指向への意識改革路線の進捗状況を報告した。質問に答え民営化の時期について「日航法の廃止が来年の通常国会で決まった場合、半年ほどの経過措置が必要なので、十月にずれこむかもしれない」との見通しを示した。【八月一日(月) 昼食会 司会 細谷洋一理事 出席 七一人】

不破 哲三 日本共産党委員長

「このクラブへ来ると字を書かされるのでシキイが高い。委員長は筆をとらずこの日もマジックペンを選んだ。目を閉じていると、宮本議長そっくりの口調なのだが、どうやら筆の方は師事しなかつ



たようだ。(宮本氏はサイン帳に力感あふれる見事な筆跡を残している) 八月四日、両党の定期協議のため訪ソ。風邪で欠席

と思われたゴルバチョフ書記長も会談に顔を見せた。書記長の訪日時期に関心が集まる中、最新のホットな感触が期待された。しかし、「時間のやりくりが一番問題。私は債務が多いのだ」と言っていた。時期を察知させるような言明なし。こちらもきくつもりがなかったとつれない。【八月三日(金) 記者会見 司会 井上好道企画委員 出席 六〇人】

ピアチェスラフ・A・ユスチノフ 国連事務次長



政治・安全保障理事会担当。このポストは歴代ソ連がおさえている。米国へ亡命し「モスクワとの訣別」(読売新聞社刊)を

著わしたシェフチェンコ氏は前々任者。国際平和年担当事務次長でもある。国連大学等が主催する国際平和年記念セミナーに出席のため来日した。【八月二日(金) 記者会見 司会 石丸和人企画委員 通訳 米倉淑子 出席 二九人】

JOHN BURNETT

ケネディそしてベトナム戦争



緒方 彰

のを持っていた。六〇年安保までの日本国内にも政治・イデオロギ―の対立を超えて、日本にはない米国の懐の広さへのあこがれのようなもの、どこかにあつたように思う。冷戦構造や、米国のアジア戦略に反発する層の中にさえ、心の奥深くでケネディに象徴されるものにひかれていたように思う（それがニクソン以降、大きく変わっていくのである）。

ことになった。東京から前田義徳専務がインタビュアーとして来ると言ってきた。そこで質問表を作ることになったが、その時はじめて、英語というものはなんとむずかしいものかとあきれた。

私がまず日本語で質問項目を書く。それを外信部で私と一緒にワシントンに赴任した高野洋記者（彼は外信屈指の英語の使い手だった）が英訳した。それをさらに支局の手伝いをしてくれた、今は南山大学教授の明石陽至君が手を入れる。それからVOAの日本課の練達の士が、かなり直す。もういいだろうと思って、当時国務省にいたナサニエル・セイヤー書記官（当時ケネディ大統領と直接話をしていただけに驚いたことがある）に持っていくと、さらに手ひどく表現を修正されてあきれはてた。質問の主旨は変わっていないのに、ほとんど英語は原形をとどめていないのである。英語もびんからきりまでであると、私はもう、なまじつかな英語の勉強はあきらめる決意をした。

あつたように思う。冷戦構造や、米国のアジア戦略に反発する層の中にさえ、心の奥深くでケネディに象徴されるものにひかれていたように思う（それがニクソン以降、大きく変わっていくのである）。

一トの主題のひとつは、ジョン・F・ケネディの暗殺である。現在のテロリズムとあの事件を、もう一度ひっくり返して真相に迫ろうとする議員、それも次期大統領の一人になるかもしれない男とCIA長官との暗闘、よくまあこんな生々しいものが書けるものだと、いまさらながら米国の独特な面白さに驚くばかりである。（それにしても日本の政治家は、書けぬのか書かないのかしらないが、メモリアルさえもおそろしく少ないのは、政治家としての大きな怠慢としか思えない）

一九八四年の米国大統領選挙でつむじ風を起こした、民主党上院議員のゲイリー・ハートが小説を書いている。「ダブルマン」は米ソのスパイ合戦というより、双方の政治の内幕を主題にしたなかなかの力作である。ソビエトの方はいささか月並な描写で雑な感じがなくもないが、ワシントンとなると、息をのむような迫力がある。ワシントンに、この何十年かいささかでも関わっている私のようなものは、出てくるレストランやクラブの名前に、その様子が目に浮かんで楽しい。へたな米国政治の教科書を読むより、この小説の方がずっと生きたワシントンの政治舞台の表裏を理解できるだろうと、若い人達に言っている。

この「ダブルマン」を書いたハ

実はこの話はここからが肝心なのである。テレビ会見の当日がきた。さしも剛直な前田さんも大いに緊張していたが、閣議室で私たちが待っていると、あの長身のケネディがいかに「米国人らしく」（これ以外の表現がむずかしい）部屋に入ってきた。ひととおりのあいさつが終わってカメラが回り始めたが、ケネディは左手に丸めたペーパーを持ったままである。おそらくその中には、こちらの苦心の質問項目と、大統領就任後、外国マスコミとはじめての会見のための、これも下僚苦心の回答案が入っているはずである。約三十分の会見中ついにペーパーは丸めこまれたままだった。一べつさえ与えられなかった。

ケネディが六四年まで生きていて再選されていたら、歴史はだいぶ変わっていたに違いない。だが歴史と「たら」は、いつもくい合わせがよくない。ベトナム戦争が、米国の国際主義への不吉なものろしになるとは、当時はまだだれも気づいてはいなかったに違いない。ベトナムの戦火に、日本のマスコミも、各社の外信部、外報部がフルに回転した。そもそも「解放戦線」とは何ものなから調べねばならなかった。六月号でこの『とおきのお話』を書いた鈴木博信氏などが情熱を傾けて、NHKの「ベトナム・ハンドブック」をつくったのを思い出す。若い外信部員、カメラマンたちが素晴らしき働きをみせた。あのころは私のマスコミ生活の中で、最も充実していた時期だったかもしれない。六五年夏ごろだったろう。「解放戦線」からサイゴンの支局ルートを通じて、その本部の取材ができる可能性がでてきた。それは、ベトナムとカンボジアの国境のど

こかにあることは分かっていたも、だれも日本人は行ったことがない。その本部に入り最高指導者に会えれば、間違いなく第一級のスクープになる。その少し前、私自身解放戦線の幹部の一人とサイゴン郊外で会って話し、その内容を帰国後放送もしたので、それも向こうには何らかのシグナルになっていたのかもしれない。準備を始めた。向こうもそれが大丈夫な方法だと言う。しかし、敵味双方の攻撃と地雷原などを通る覚悟があるし、危険もある。報道局長は「局長としてそんな危険は許可できぬ」と言う。当然であつたらう。私は私でつっぱった。妥協が成立した。予備の第二のルートとして、当時まだ平穏だったカンボジアのプノンペンから、つまり裏口から入るといふ案である。

この両方の道で見通しのついたより安全な方をとろうということになり、急ぎょプノンペンに吉田和人サイゴン支局長と、今はバリの総局長の萩野記者とカメラマンを派遣した。向こう側と接触はできしたが、一向に確たる回答がこない。取材チームはイライラしながら、ひまつぶしに北朝鮮なども参加したフットボール大会とか、アンコールワットとかを、気もそぞろに取材した。結論として、この解放戦線本部潜入作戦は、乾期終了時間切れに終わり、天を仰いで嘆息した。そのフィルムは、仕方なくカンボジアの別番組として放送した。変な感じだった。

ところがしばらくすると、在日カンボジア大使館から、NHK取材チームに勲章を授与するから来てくれと言う。日カ文化交流に功績があつたからだと言う。部長として私も授与式に出席した。

勲章をうけとる吉田君や萩野君の、何ともいえない表情。見て私の胸にも、ほろ苦いものが流れた。壁のシアヌーク殿下は、にこやかに、ふくよかに笑っていた。

おがた あきら氏略歴 大正十年別府市出身。東京大学法学部卒。昭和二十二年NHK入局。フンント支局長、外信部長、解説委員長などを歴任。五十四年退職。現在、評論家、松下政経塾常務理事。

新自ク 解散

ワーキングプレス

与野党伯仲時代の「先兵役」を果たした新自由クラブが解党、十年間の歴史に幕を閉じた。ロッキード事件で自民党内が揺れた五十二年六月、代表だった河野洋平氏を中心に六人の国会議員が離党、新自クを結成した。その年の暮れの任期満了総選挙ではブームを起こし、十八議席に飛躍したものの、その後は一進一退を繰り返して、党内対立が続いた。田中元首相が倒れ、一枚看板の「政治倫理」も色あせ、先の同日選での自民党圧勝を受け、さすがの河野氏も持論の「保守二党論」を撤回、復党を決断しなくてはならなかった。

新自クの解党、自民党への復党は、五十八年暮れ、中曽根内閣と連立政権を組んで以来、ささやかれていた。同日選での自民党の圧勝を受けての政局では、ほとんどは「早くても秋」との見方であった。『女房役』の幹事長、山口敏夫氏にとっても突然のことで、「ハワイで、河野さんから、国際電話で知らされた。翻意を促したが、最後通告のような内容だった」と

予定より早く情報もれる

説明している。同日選後、新自ク内は、引き続き自民党と統一会派を結成すべきだとする山口氏らと、独自会派を主張する田川誠一氏（前代表）との対立が起きていた。結局、山口氏らの路線にまともなものの、このゴタゴタ劇の中に、解党・復党への伏線がはられていた。

松田喬和

山口氏が遠からず自民党に復党する腹づもりでいることを、河野氏は感じとった。一方、相手側の中曽根首相は、これまで再三にわたり、河野氏に戻るよう打診してきたにもかかわらず、統一会派問題では、河野氏が妥協案を持って、首相とひざ詰め談判を申し込んだが、にべもなく拒否した。さすがの河野氏も「復党した方がやり易い」と弱音を吐くようになっていた。

河野氏がスムーズに復党するに

は、中曽根内閣であることが一つの要件ではあった。中曽根派の源流は河野氏の実父、一郎氏（故人、元建設相）が作った河野派であり「血は水よりも濃い関係にある」（山口氏）からだ。しかも、中曽根政権の最大の危機を新自クが連立政権を組むことで乗りきったことから、首相には貸しがあったからだ。

こうしたことから、河野氏が復党工作を急いだようだ。復党への最大のネックは田川氏であった。これまでの党内対立では、河野氏は田川氏と袂を分かつたことはない。逆に、田川氏まで含めた復党となると、自民党内の抵抗は一段と高まることも、火を見るよりも明らかだ。結局、田川氏だけは復党しないことを、互いに了解したことで、障害はなくなった。

会議員のエゴのための解党か」「新自クは河野私党ではない」との抗議電話が殺到したものの、その後の解党劇は順調に進んだ。早くも、自民党内では、河野、山口氏らの所属派閥をめぐって、様々なウワサが飛び交っている。「保守の星」と期待されていた河野氏や山口氏にとって、新自クの十年は「まわり道」だったのか、それとも「政治家としての幅を広げる貴重な体験」だったのか。十年後には結果が出ているだろうが、久し振りの人間臭い政治劇を見せてもらったとの思いが深い。

（まつだ たかかず 毎日新聞社政治部）



真一文字に口をむすんだ河野代表（8月15日）

今年の就職戦線

ワーキングプレス

「いい学生を早く採りたい」協定を正直に守っていて遅れをとらないか、企業の本音を代弁すれば、こんなことになるだろうか。

八月二十日、大学生の会社訪問が一斉に解禁された。各企業の説明会場には、紺やライトブルーなど清潔色のスーツに身を包んだ学生たちが次々に訪問。人気企業の前では、長い行列ができるなど、解禁初日の光景が数年ぶりに復活した。

この八月解禁、従来と比べると、大きな様変わりである。会社訪問は、ここ十年間「十月一日解禁」が続いていた。それが「夏休みを有効に使わせたい」とする大学側の強い要望などから、ことし初めて夏解禁に改められた。

しかし、その背景をたどれば、文部省や労働省の再三にわたる呼びかけにもかかわらず、青田買いや、時には早苗買いという学生狩りが半ば公然と行われ、本来、学生と企業の初顔合わせとなるはずの十月一日には、大半の学生が内定を取りつけてしまっ

ているという現実があった。事実、昨年の例でも、六割の学生が八月以前に「内定」を得ていた。「それなら、実情に即した日程に」と、企業、大学双方が八月解禁実施を決めるきっかけとなった。

守られない就職協定をめぐっては、ことし、その存在さえ問われもした。あきれ果てた労働省などは五年前に、「どうぞ、ご勝手に」と、サジを投げてしまった。

夏に始まった会社訪問

山中保男

が、協定は、かろうじて生き残ることができた。日経連、経団連など経済四団体が「協定を守れ」と号令をかけ、五月七日、富士銀行、住友銀行、三菱化成、三菱商事など大手五十二社のトップを招集し、「就職協定順守懇談会」を

結成した。その後参加メンバーは百十五社に広がった。「事前に学生とは接触しない」「採用内定は出さない」「学生を拘束しない」

などが合意事項。批判が集中する中で、企業側が初めて宣言した決意表明だった。

民間主導の相互監視で、表面的には、青田買いなどのフライングは影をひそめた。クラブやゼミの先輩OBが、後輩学生を飲み連れ歩いたり、懇談会と称して、宴会に招いたりなどの事前接触は、めつきり姿を消した。

だが、「監視の目を盗んだところで、学生と接触しているケースはかなりある」との声も聞こえてくる。

実際、会社訪問初日に大手都銀の玄関先に並んでいた学生の一人は「内緒ですが、銀行からぜひ来て欲しいと言われてます。内定はもらっていませんが、私自身は、(内定と)受けとめています」と、打ち明けてくれた。

ことしの就職戦線で、もうひとつ注目されるのが、女子学生の採用である。四月施行の男女雇用機会均等法が生かされるかどうかという点だ。求人数では確かに昨年比一二・四%の伸びとなっている

が、その内実は「正直なところ、フタ(実際の採用数)を開けてみなければ分からない」(就職情報担当者)のが実情のようだ。

各企業とも「男女で計何人」と大枠提示をしており、この中に女子が何人含まれるかは、ひとえに採用側の胸の内にかかっている。

晩夏のいま、都心のオフィス街では、学生たちが額に汗して、会社行脚を続けている。採用試験開始は、これまで通り十一月一日から。その時、これらの課題が、どうなっているのか注目していきたい。

(やまなか やすお サンケイ新聞社社会部)



新人類も緊張の面持ちの会社説明会

スタジオ訪問

東京放送

〔レポート6〕

身近かな情報
感じるニュース

《レポート憲法》

- 第一条 テレビの力に自信を持って
第二条 建前で作るな本音で追及
第三条 タブーは作るな
第四条 独断と偏見で作れ
第五条 原稿で語るなVTRで語れ
第六条 クロウトになるな
第七条 じっくり作るな、荒々しく作れ
第八条 じっくり作れ、いくらでもこれ
第九条 新聞から照れずにネタをとれ
第十条 庶民の平凡な喜びや悲しみを大切にしよう

これは昭和五十年十月、『レポートTBS6』(月と金午後6時から30分)が、首都圏初のローカルワイドニュースとしてスタートした時に、デスクの一人がつくったものだ。ちょっと表現は荒っぽい、身近かな情報・感じるニュースがモットーの同番組の姿勢がよく分か

る。「教科書ナンシでしたから、冒険でした」と藤林英雄プロデューサーは語る。当時ローカルワイドブームが全国に広がり、すでに十四局が先発。が、そのほとんどは県域放送だった。一都六県、三、七〇〇万人という広エリアのローカルワイドは実験だったと言う。そこで既成のニューススタイルを払拭しようと、

背広をぬいでを合言葉にした。大所高所からもものを言うのではなく、「視聴者と同じ立場で」というわけだ。一方通行のニュースから、送り手と受け手の間の双方向性を指向した。

そのひとつが視聴者情報。電話十本をスタジオに設置し、「身の回りの情報をお寄せください」と、毎日毎日呼びかけた。すると身近かな話題、暮らしの問題が一日に何十本も、多い時には百本も寄せられた。そして投書も。視聴者をまき込むこの方法は成功した。国会で法改正にまでもちこんだ例のベビーホテルキャンペーンも、一主婦からの手紙が発端だった。このように「ニュースの発掘はほんの一片の情報にどうくつくかだ」と藤林さんは言う。同番組の視聴率は15%前後、ファン層は中高年齢だそうだが、なにげない情報から深く重みのあるテーマの追及へ、この繰り返しだが視聴者との信頼関係を育てたのだらう。

ローカルならではの名物メニューが二つある。「関東キャラバン」と「甲子園シリーズ」だ。前者は毎年春と秋にキャスターがスタジオを飛び出し、一週間一都六県の各地を回りながら生中継するもので、関東各地の素顔を紹介する楽しい企画だ。一方「甲子園」は、春夏の高校野球の期間中、連日関東勢をしつこくレポートする。

「全くの地元びいきで前畑ガンバレ式の応援ですから、関東には他県の出身者も多いんだぞ、と抗議がきたりもします」とキャスターの山本文郎さん。山本さんはもとと音楽・芸能畑のアナウンサー。「こんな私がニュースを読んでいいのか、と最初は悩みました」と語る。初登場の日「ニタニタしてニュースを読むな」という電話もあったと明かす。しかし、十年でニュース番組も多様化し、カミシモもとれた。文字通り背広をぬいでスタジオ入りしてきた山本さんに、今は違和感はない。

相棒の女性キャスター・新井瑞穂さんは三代目。「番組のオープニングのメロディー(小室等作曲)が、高校時代から私の生活の中に溶け込んでいました。あこがれの番組だったんです」と笑う。スタジオを訪問した八月十三日、トップニュースは「お盆の帰省ラッシュ」。そして特集として「四十二年目の鎮魂・

ああ従軍慰安婦」。その間に、関東各地の盛夏のスケッチがもりこまれ、お天気や「甲子園シリーズ」も。雑色性のメニュースだ。「レポート」がローカルワイドとして従来のニュースと一味違った編集ができたのは、後に「ニュースコープ」がひかえていたからとも、藤林さんは語る。「あちらではニュース性の高いものをおりめ正しくきちんとやる。前座のこちらは、だからこそ八方破れの冒険もできました。しかしもうすぐ十一歳、これからは大人の考え方をした番組づくりを、と思っています」。

東京キー局の六時台は、この十年で大きく様変わりした。各局各様のカラーでのぎを削っている。秋には六時スタートのニュースがまた一本(NTV)加わるといふ。「新六時激戦時代」だ。

(長谷川和子)



なごやかでアットホームな雰囲気番組は進む
(キャスターの山本さん・右と新井さん)

プロフィール

八月一日付入会の個人D会員、法人・個人賛助会員、特別賛助会員の方々です。

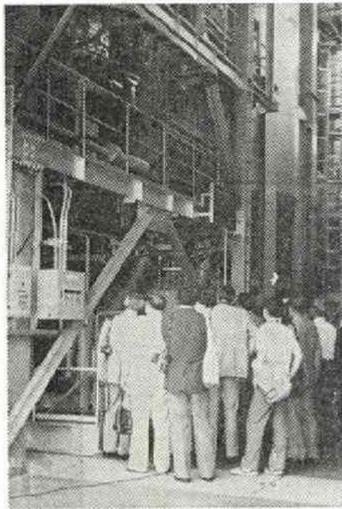
九月一日現在の会員状況	
法人会員	一四六社
基本会員	六一九人
個人会員	一、三一九人
法人・個人賛助会員	七七社
特別賛助会員	二三三人
名誉会員	七六人
計	二二三社 二、二六三人

見学会 日本原子力研究所東海研究所

上野から特急で一時間半、東海駅からバスで十分。原研東海研究所の更田豊治郎副所長のブリーフィングを聞き、二班に分かれて見学した。

同研究所は昭和三十二年に設立、広大な敷地内に数々の実験研究施設が点在する。そのうちの安全性研究に関する四つの実験設備を見た。

▼大型再冠水実験装置 原子炉が空だき状態にならないよう、非常冷却水を流し込み炉心を一定の温度に保つシステム。どの順序で冷却水を流すかを実験によって調べる。小さなビルほどの装置で、大小無数のパイプが無気味。日・米・西独協力計画のひとつ。(写真上)



▼大型非定常試験装置(LSTF) 専門

用語でいう冷却材喪失事故(米スリーマイル島型)での循環系の動きを調べるもの。体積は実物の四八分の一だが、実際の対流を見るため、高さは実物大。二、五〇〇の測定点からのデータを制御室で集計、除熱冷却方式を研究。

▼実用燃料試験室 使用済み核燃料(濃縮ウラン合金)を持ち込み、異常の有無を調査。厚いコンクリートと鉛入りのガラス窓の向こうの燃料をマジックハンドで切断、分析。(写真下)

▼原子炉安全性研究炉(NSRR) 深さ九メートルのプール底の炉心と、燃料の状態が見える実験炉。「チェルノブイリは炉型もややかたも違うので問題外」と案内の職員。(8月22日 参加者54人)



▼夏の花々が盛りすぎ、朝顔、ひまわり、葵、芙蓉などがなお咲き続けているもの、陋屋の小庭が淋しくなってきた

した。菜園のとうもろこし、枝豆はとりつくしたし、きゅうり、なす、トマト、西瓜も間もなく終わります。つくづく法師が鳴きだし朝夕はもう秋です。梅雨明け後、カンカン照りは十日くらいしかありませんでした。

三年前にガンで喉頭を剝出したのち退院、埼玉の比企丘陵の一隅にちつ居して一年三か月。リハビリ生活を送っています。土いじりか溢読で、最近では吉村兄の「総理の放言、失言」を楽しく読みました。

そういえば九月から国会ですね。国鉄再建、不況や貿易摩擦対策、減税そして予算等々、難問山積。中曽根さんの統投とどう関連させていくか? 考

えるだけでけっこう退屈はしませんが、体力回復未だしのせいか、積極的な迫力ある構想が湧きません。諸兄にはくれぐれも健康に留意してもらいたいと思います。

(時事通信社 佐藤 達郎)

▼九月末に離日、シンガポールを基地にして単身、長期滞在します。念願の東南アジア歴史ドキュメンタリーの本を書くための勉強・取材活動です。これまでもアセアン地域へは平均二年に一回ほど(昨年は九、十月)取材旅行していますが、やはり現地に住み本腰を入れてやらねば、と考えてのことです。幸いシンガポールリアンの親友・トップジャーナリストが温かく協力の手を差し伸べてくれたので実現しました。ハッスルしております。今後とも会員諸兄のご指導、ご激励を賜りたくお願い申しあげます。

(個人D会員 土肥 良造)

八階の会議室をご利用ください

八階の事務局に併設して、応接室、第一会議室、第二会議室もオープンしました。応接室は上等なソファ六脚に速記者用テーブルが入っており、インタビュ

一、座談会に最適です。第一会議室は十二人、第二会議室は十四人までの会合にご利用いただけます。各室の料金は次の通りです。(二時間単位)
応接室 一五、〇〇〇円
第一、第二会議室 一〇、〇〇〇円

写真部

写真 竹岡幸彦 (中日新聞社 写真部)



警官のタマゴになるなよ

第二次大戦中、さる独裁者が「人ひとり殺せば殺人だ。だが、五十万人を殺せば、単に統計の問題になる」うんぬんと、うそぶいたという話がある。正気の沙汰ではないが、現在の日本の交通戦争も、少しずつそんな非人間的状況に近づいてはいないか。昔はよく「男は外に出れば常に七人の敵あり」などと、生存競争の厳しさを形容したものだ。冗談ではない。いまでは男も女も、外に出たとたん七台のクルマに狙われている。

写真は名古屋市中村区のチビッ子たちが、交通死の絶滅を訴えるキャンペーンに駆り出され、街頭へ出かけていくところ。巡査階級章、夜光つき交通腕章、それに警笛まで大人の警官と同じものをもらって誇らされた。

それにしても、こどもたちに交通道徳を教える代わりに警官の服装をさせ、街頭で取り締まりの訓練をさせるのは、本末転倒にみえる。交通戦争も、一般の戦争と同じで原因は「こころ」の問題だからだ。

が、そうではなかった。事故防止には警官が街頭で制服や警笛で威圧するのが、当節最も効果的なのだそう。こどもたちは、そんな大人の「心理作戦」を学んでいく。

(仲 晃)

事務局の電話は(五〇三)二七二二です

九月一日から事務局が八階に移りました。電話も〇三(五〇三)二七二二に変わりました。九階受付の電話は従来通り〇三(五〇三)二七二二で変わりません。クラブ行事への申し込み、宴会・レストラン関係ならびに会員の呼び出し等は、九階のフロアマネジャーの方へお願いいたします。

国・公賓の記者会見

起立して拍手をお願いします

国・公賓の記者会見または昼食会で、ゲストが入退場する際には、起立して拍手をしていただくようお願いいたします。また、ゲストをお送りしてから、退席されるようご協力願います。

テレビ、ビデオデッキもご利用ください

借し出し用としてテレビ(28インチ)とビデオデッキ(VHS方式)を購入しました。これまでもジャンボな画面をもつビデオ・プロジェクトジョンとデッキ(ベータ方式)が記者会見室にありましたが、大きすぎてはかの会議室への移動には不便でした。

これでビデオデッキも、ベータとVHSの両方式がそろいましたので、会合でも幅広くご利用いただける

◇会員・会費事務 企画・会報関係等

(8階 事務局) 〇三(五〇三)二七二二

◇会議室・レストラン予約 会員呼び出し クラブ行事への申し込み

(9階 受付) 〇三(五〇三)二七二二
◇クラブ行事案内 〇三(五〇三)三七六四

と思います。料金はテレビ、ビデオデッキいずれも三、〇〇〇円です。

土曜の夜のレストランは休業です

既報のように、土曜の夜のレストランは、七、八月の臨時休業を延長させる形で、九月から通年にわたり休業となりました。ご了承願います。

十月二十四日に第47回ゴルフ会

秋のゴルフ会を次のとおり開催します。参加ご希望の方は十月三日までに事務局へお申し込みください。(電話五〇三二七二二)

日時 十月二十四日(金)

コース 都留カントリークラブ

会費 五千円

(新宿西口より送迎バスがあります)

クラブ訪問者

8月12日 鮮于煉韓 韓国プレスセンター事務総長兼韓国記者クラブ委員長 8月19日 マリク・ニアン ニジエール 義典長

会員の著書(ご恵贈いただきました)

挑戦する香港 伊藤喜久蔵
だから英語は面白い 村松 増美
プロが教える翻訳のコツ 河合 伸

寄贈書

小事典 世界女性史 エッソ石油
展覧会の招待券 朝日新聞社から「日本の山・名作展」
「近代の見なおし」、平野光男会員(西武美術館)から

「四季百樹の詩展」「智恵子紙絵展」の招待券をご恵贈いただきました。お礼申しあげます。

キュービクル空室のお知らせ

プレスセンター八階のキュービクルに一・九坪の部屋が空いています。報道関係社の取材の足場、評論家の方々の仕事部屋として利用できます。入居ご希望の方は朝日本プレスセンター事務室(電話〇三一五八〇一五八一)へご連絡ください。

計報 平岡敏男会員(毎日新聞社)が八月六日肝不全のため、石井林寧会員(個人D)が同九日肝こうへんのため逝去されました。謹んで両会員のご冥福をお祈りいたします。

九月の行事(1日現在)

17日(水) 午後1時〜2時30分 アバ・エバン
イスラエル元外相記者会見
18日(木) 午前10時30分〜11時25分 セイニ・ク
ンチュエ ニジエール最高軍事評議会
長記者会見
24日(水) 午後3時30分〜5時 グスタボ ペト
リチオリ メキシコ蔵相記者会見

会報委員長 深川 誠

委員 小林 利隆 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三二七二二